

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3004号 2016.5.6 発行

社説：こどもの日 未来照らす笑顔のために 西日本新聞 2016年05月05日

その笑顔 未来を照らす 道しるべ。「こどもの日」のきょうから児童福祉週間が始まる。今年の標語は福島県の13歳の作品だ。

身近な子どもの笑顔を思い浮かべながら、この標語の意味をかみしめたい。併せて、苦しみや不安を抱えて生きる子どもたちに思いを寄せたい。

平均的な所得の半分を下回る世帯で暮らす18歳未満の割合を示す「子どもの貧困率」は、2012年時点で16・3%と過去最悪だった。九州の貧困率はもっと高いという試算もある。

国連児童基金（ユニセフ）が先月、最貧困層と標準的世帯の所得差に関する国際比較を公表した。日本は先進41カ国中、8番目に格差が大きな国だった。

「貧困と格差」の問題は深刻さを増している。子どもの健やかな成長を願う日だからこそ、この厳しい現実をまずは直視したい。

▼連鎖を絶つ教育の力

飢餓などで生命の危機に直結する途上国の貧困と異なり、先進国の相対的貧困は見えにくい。

だが、金銭的に追い詰められた生活は、子どもの心身の成長に暗い影を落とす。進学や就職の選択を奪われることも多い。

その結果、不安定な低収入の仕事へと導かれ、生活の困窮が次の子どもの世代に引き継がれる。いわゆる「貧困の連鎖」である。

子どもの貧困対策推進法が2014年に施行されたが、現状を変えるにはまだ力不足と言わざるを得ない。

ひとり親世帯の貧困率は5割を超える。シングルマザーを中心に、低賃金の非正規雇用が多い事情が背景にある。

ひとり親などを対象にした資格取得のための貸付金創設といった就労・生活支援が設けられた。定期的に効果を検証し、改善を重ねる必要がある。

非正規雇用の待遇改善や正社員化の議論を、もっと深めることも求められるだろう。

能力に応じた教育の機会均等は、憲法によって保障されている。親の経済力に左右されず、十分な教育を受けられる環境は、貧困の連鎖を絶つには不可欠である。

段階的に進む幼児教育の無償化をもっとスピードアップしたい。

大学生などに授業料などを貸与する奨学金の返済が卒業後の生活を圧迫しているとの指摘もある。多くの人々が利用しやすい給付型奨学金の創設、私立大の授業料減免制度の拡充など、進学の道を広く確保する方策を探りたい。

▼地域ぐるみで支援を

安倍晋三首相は今年1月の施政方針演説で経済対策や社会保障とともに子育て支援を重要政策として訴えた。演説の最後に首相は日本で初めて孤児院を設立した石井十次（1865～1914）の児童福祉への「挑戦」に、自らの「1億総活躍への挑戦」を重ね、不退転の姿勢を示した。

子どもの貧困撲滅にかける首相の決意表明と受け止めたい。ならば、英国のように貧困率削減の数値目標を明示して、対策を力強く進めるべきではないか。

「児童福祉の父」と呼ばれた石井は晩年、岡山県に開設した施設の多くを郷里の宮崎県に移した。日誌には、困窮する子どもの救済に日々「責任を負ふ」ことは、「即（すなわ）ち日本社会を双肩に荷（にな）ふ」ことだという信念を記している。

政府はもとより、私たちも広く共有したい理念である。

子どもの貧困を放置すれば、将来の税収減や生活保護費の増大を招くとされる。日本財団は、現在の15歳の1学年だけで試算しても、政府の財政負担は約1兆1千億円膨らむと警告している。

子どもの貧困対策への公的支出は「未来への投資」と考えたい。

私たち市民が地域で取り組める支援もある。子どもたちに、無料または格安で食事を提供する「子ども食堂」は、その一例だろう。九州各地に取り組みが広がっている。学習支援などにも分野を広げ、補助金などによる自治体の積極的な後押しを期待したい。

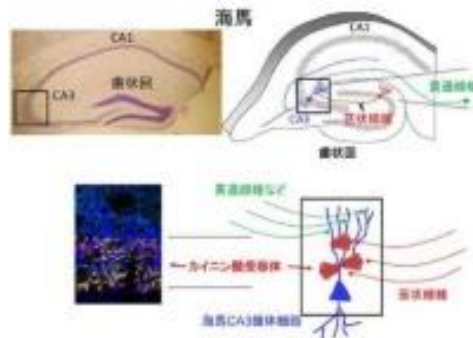
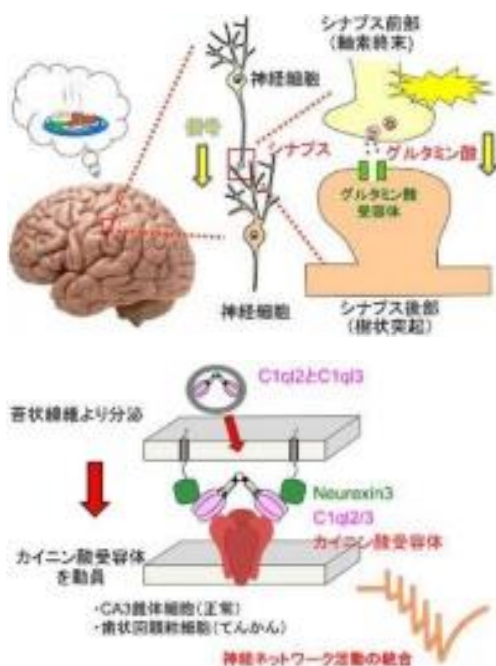
先月24日、福岡市で「こども食堂サミット in 九州」が開催された。子ども支援に取り組むNPO法人の栗林知絵子理事長は基調講演で、こう呼びかけた。

「地域が一步を踏み出せたら、すべての子どもたちが笑顔になれる」。その先に広がる未来は、きっと明るいはずだ。

てんかんや自閉症の治療につながる脳神経メカニズムを解明 工藤 宗介＝技術ライター

日経テクノロジー 2016年5月6日

シナプスにおけるグルタミン酸とその受容体を介した信号伝達の仕組み (図：慶應大学のプレスリリースより)



シナプスにおけるグルタミン酸とその受容体を介した信号伝達の仕組み (図：慶應大学のプレスリリースより)

Neurexin3-C1ql2/3-カイニン酸受容体が三者複合体を形成してシナプスの機能を制御する (図：慶應大学のプレスリリースより)

C1ql2/3 欠損マウスにてんかんを人工的に誘導する刺激を与えても、カイニン酸受容体が動員されず、てんかん発作が出にくくなる (図：慶應大学のプレスリリースより)

慶應義塾大学は2016年4月28日、神経ネットワーク活動の統合に必須の働きをするカイニン酸受容体がシナプ스에組み込まれるメカニズムを解明したと発表した (ニュースリリース)。このメカニズムはてんかんや自閉症に深く関わっていると考えられており、今回の研究成果がこれらの病気の原因解明と治療法開発に役立つことが期待される。

学習や記憶といった脳の高次機能は、神経細胞同士の接続によって作られる神経回路が



担っている。脊椎動物の中樞神経系では、神経細胞の接続点であるシナプスの前側に存在する神経細胞が放出するグルタミン酸を、その次の神経細胞に存在するグルタミン酸受容体が受け取ることで、神経興奮が伝達される。現在、多くの精神疾患や発達障害は、シナプス形成や機能の異常である「シナプス病」であると考えられつつある。

カイニン酸型グルタミン酸受容体（カイニン酸受容体）は、記憶・学習に重要な働きをする海馬の中で、歯状回顆粒細胞の軸索（苔状線維）と CA3 錐体細胞が形成するシナプスに特に多く集積し、神経ネットワークにおける活動を時間的・空間的に統合する役割をすることが知られている。また、側頭葉てんかんでは、苔状線維が異常なシナプスを新たに形成し、カイニン酸受容体の活動を介しててんかんの発生源となっていることも分かっている。しかし、正常状態および病的状態で、苔状線維が形成するシナプスにのみカイニン酸受容体が集積する仕組みについては良く分かっていなかった。

これまで、自然免疫系の古典的補体経路の標的認識タンパク質である補体 C1q と似た構造の C1q ファミリー分子が、中樞神経系のさまざまなシナプス形成を制御することが分かっている。今回、C1q-like (C1ql) 2 と C1ql3 という C1q ファミリー分子が、海馬の歯状回顆粒細胞で合成され、苔状線維から分泌されて苔状線維-CA3 錐体細胞シナプスに限定して存在することを明らかにした。

C1ql2/3 遺伝子を欠損するマウスでは、苔状線維-CA3 錐体細胞シナプスそのものは正常に形成されたが、このシナプスに多量に存在するはずのカイニン酸受容体がほぼ消失していた。これにより、シナプス前部の苔状線維が分泌する C1ql2/3 が、シナプス後部の CA3 錐体細胞シナプスに存在するカイニン酸受容体に直接働きかけて集積させるという機構を発見した。また、C1ql2/3 は、苔状線維に存在する Neurexin3 というタンパク質とも同時に結合することも発見した。シナプスを挟んだ形で Neurexin3-C1ql2/3-カイニン酸受容体という三者複合体を形成することでシナプスの機能を制御すると考えられる。

側頭葉てんかん患者およびそのモデル動物では、苔状線維が異常に伸び、通常は観察されないシナプスが歯状回顆粒細胞の上に作られる。このシナプスにカイニン酸受容体が動員されることで神経ネットワーク活動の異常を引き起こし、てんかんを発症しやすくさせると考えられている。C1ql2/3 欠損マウスにてんかんを人工的に誘導する刺激を与えると、苔状線維の異常シナプスが歯状回顆粒細胞上に形成されるが、カイニン酸受容体がこのシナプスに動員されず、てんかん発作が起こしにくくなることが分かった。

カイニン酸受容体や Neurexin3 遺伝子の変異は、一部の自閉症患者においても報告されており、C1ql2/3 によるシナプスへのカイニン酸受容体の動員と機能制御機構の解明は、これらの病態の究明につながる可能性がある。また、C1ql2/3 は分泌型タンパク質であることから、C1ql2/3 とカイニン酸受容体との結合を直接阻害させることができる可能性があり、てんかんや自閉症の新しい治療法の開発が期待されるという。

新潟大学、東京大学、北海道大学、英オックスフォード大学との共同研究。今回の研究成果は、米国科学誌「Neuron」オンライン速報版に4月28日（米国時間）掲載された。

発達障害などで通級指導の子ども 9万人余 過去最多 NHK ニュース 2016年5月6日

発達障害などのため通常の学級で学びながら一部の授業を別の教室で受ける「通級指導」の対象となっている小中学生は全国で9万人余りと、これまでで最も多くなったことが文部科学省の調査で分かりました。

「通級指導」は、読み書きが苦手だったり対人関係をうまく築けなかったりする障害のある子どもが、ふだんは通常の学級



に在籍し、障害の状態に応じて一部の授業を別の教室で受けるものです。

文部科学省が全国の公立小中学校を対象に調べたところ、通級指導を受けている子どもは去年5月1日の時点で9万270人と、前の年度より6520人増え、これまでで最も多くなったことが分かりました。調査を始めた平成5年度に比べて7倍余りに増えています。

障害別にみますと、言語障害が最も多く3万5337人、次いで注意欠陥多動性障害が1万4609人、自閉症が1万4189人、学習障害が1万3188人などとなっています。

一方、障害に応じた指導ができる担当教員は7006人と前の年度より444人増えましたが、教員1人当たりが担当する子どもは平均で13人と、ここ数年、横ばいとなっています。

文部科学省は「障害のある子どもには丁寧な少人数指導が求められるので、担当教員を充実させたい」と話しています。

「だれでも便利に」航空会社・ホテル、障害者対応を加速 森本美紀

朝日新聞 2016年5月6日



全日空の「スペシャル アシスタンス カウンター」での遠隔手話通訳サービスの場面。タブレット端末の画面の手話通訳オペレーター（中央）が、全日空の女性スタッフ（左）の言葉を手話で表現し、聴覚障害のある客（右）の手話を音声で女性スタッフに伝える＝羽田空港国内線第2旅客ターミナル



2020年の東京五輪・



パラリンピックを見据え、航空会社やホテルが、障害のある人へのサービスを拡充している。4月1日に施行された障害者差別解消法なども背景に、「だれにとっても便利で快適なサービスを」という動きだ。

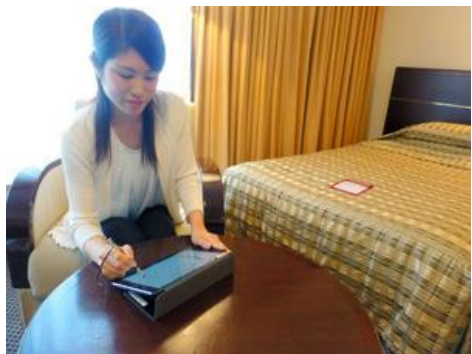
■樹脂製車いすで検査時間短縮

全日空は4月21日、羽田空港国内線の利用客に貸し出す車いすを金属探知機に反応し



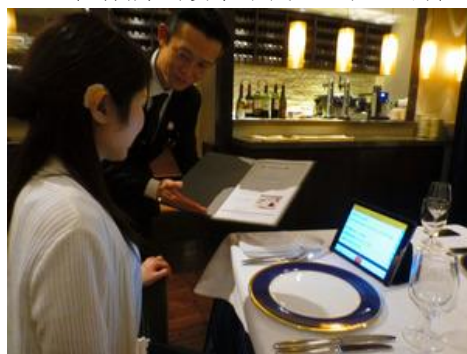
ない樹脂製に換えた。

車いすの利用者は、チェックインの際に自分の車いすを荷物として預け、同社が用意した車いすに乗り換え、保安検査場を通るのが一般的だ。だが、この車いすは金属製。利用客が金属を身につけていなくても探知機に反応し、ボディチェックを受けなければなら



なかった。

こうした不便をなくそうと、同社は13年、車いすメーカーの松永製作所（岐阜県養老町）と新製品の開発を始めた。試行錯誤の末、実現したのが樹脂製の車いすだ。座面のクッションやベルトを除き、車輪や軸受けなどが強化樹脂でできている。



羽田空港国内線第2旅客ターミナルに64台を導入。20年には、国内の空港（4月28日現在、49カ所）に計500台を備える計画だ。

育児と仕事サポート 病児病後児保育室開所

河北新報 2016年5月5日

開所した「じょっこおながわ」の保育室

仕事を休めない保護者らに代わって病気の子どもの預かり、体と心をケアする女川町の病児病後児保育室「じょっこおながわ」が開所し、子どもの受け入れを始めた。

「じょっこ」はいとおしいという意の方言で、保育室は町地域医療センターに隣接する町地域福祉センターに設けた。

対象は0歳～小学3年程度。保育士と看護師がケアし、子育ての悩み相談にも応じる。利用は有料（町内の生活保護受給世帯は無料）で、登録が必要になる。



2日の受け入れ開始に先立ち、4月28日にはオープニングセレモニーが現地であり、保育室長の今野友貴医師ら約30人が出席。保育室を開設した町地域医療センターの斎藤充センター長が「女川の子どもたちが病気になっても保育を受けられ、保護者が子育てと就労を両立できるよう頑張る」と述べた。

2児の父の須田善明町長は「子どもが病気になった時の支援機能が町にあることは大切。大きな生活の基盤となる」と期待した。

連絡先はじょっこおながわ0225（53）5511。

災害時に安否確認＝カード活用拡大探る－マイナンバー 時事通信 2016年5月2日

社会保障と税の共通番号（マイナンバー）制度をめぐる政府は、同制度で用いるICチップ入り個人番号カードの活用拡大を目指している。行政手続きだけでなく、災害時の安否確認への利用などを検討しており、住民の利便性向上につなげる。

個人カードは、使用目的が法律で限定されたマイナンバー部分の他、ICチップ内にあ

る本人確認用の電子証明書と空き領域部分（マイキー）で構成される。マイキーは総務相の認定を受ければ、民間事業者も利用できる。

活用策の一つとして検討が進んでいるのが、災害時の住民の安否確認。徳島県美波町では3月、個人カードを活用して避難訓練が行われた。住民が氏名や個人カードの情報を民間事業者が開発したシステムに登録すると、自治体からの避難指示がインターネット機能のあるテレビで映るようになる仕組みを体験。このシステムは、住民が避難所で読み取り機にカードをかざすことで、町や親族が安否を確認しやすくなるメリットもある。

また総務省は、自治体が発行する各種ポイントや民間のクレジットカードのポイントなどを個人カードに一元化したい考え。個人カード1枚で商店街の買い物ポイントをためて使えるようにし、地域経済の活性化も狙う。

カードの利活用の検討が進む一方で、住民に交付された枚数は4月26日時点で337万枚と、申請があった1003万件の3割強にとどまる。高市早苗総務相は「せっかく使い勝手の良いカードになっても、カードそのものが手元に届かなければ何にもならない」と危機感を示す。交付遅れの原因となったカード管理システムの不具合が解消されたことを踏まえ同省は、市町村窓口での交付の加速に向けた支援を強化する予定だ。



【第63回産経児童出版文化賞】翻訳作品賞『テンプル・グランディン』

産経新聞 2016年5月5日



(汐文社・1600円+税)

『テンプル・グランディン 自閉症と生きる』サイ・モンゴメリー著、杉本詠美訳（汐文社・1600円+税）

1947年、米マサチューセッツ州に生まれたテンプルは、笑いもしなければ、抱っこもいや、よく癩癩（かんしゃく）を起こす女の子だった。

3歳で自閉症と診断。母親は彼女に普通教育を施すことを願うが、中学校で退学処分。だが障害児に配慮した寄宿学校への転校を機に、その才能が開花する。

羊小屋や厩舎（きゅうしゃ）まで備えたこの学校で牧場の仕事に出会ったテンプルは、鋭敏な感受性を生かし、牛が予防注射を受ける時の恐怖を緩和する装置を発明。大学で家畜の行動を研究した後、動物に優しい牧畜施設的设计者として活躍する。今では米国とカナダの肉牛の半数は、彼女の設計した施設で飼育されているという。

幼少からの写真やイラストも配され、個性的な少女の成長物語に寄り添いながら読むことができる。自閉症の当事者がどう感じ、周囲の環境と格闘しているかを体感できる貴重な一冊。（東京子ども図書館理事長・張替恵子）

パナマ文書、「身の安全を守るため」共同取材に

読売新聞 2016年05月05日

【ベルリン＝井口馨】タックスヘイブン（租税回避地）の利用実態を暴露した「パナマ文書」を最初に入手した南ドイツ新聞の記者フレデリック・オーバーマイヤー氏が3日、

ベルリンで記者会見した。

自社だけで調べずに国際調査報道ジャーナリスト連合（ICIJ、本部・米ワシントン）に文書を提供して、共同取材を行った理由について、「自身や家族の安全を確保するため」と説明した。

オーバーマイヤー氏は、匿名の情報提供者を通じて電子メールなど1100万件以上の流出情報を入手したが、「武器や薬物の密売人などジャーナリストを消すことをいとわない人々の名前があった」と振り返った。英BBC放送など各国のメディアや約400人の記者と情報を共有したことについて、「入手した情報が奪われにくい。危害も加えられにくい」と語った。

FM OSAKA「おとなの文化村」放送400回突破 「大阪を元気に」テーマに



産経新聞 2016年5月5日
放送400回を突破した「おとなの文化村」。右はパーソナリティーの野杵育郎さん＝大阪市浪速区

FM OSAKAの日曜日の深夜番組「なにわルネサンス おとなの文化村」（月曜午前0時～）が、放送400回を突破した。大阪のユニークな土産物を相次いで発表している「なにわ名物開発研究会」代表幹事の野（の）杵（いり）育郎さん（68）を中心に、大阪などで活動している人たちをゲストに呼び、ゆるいトークを繰り広げている。「自主制作番組で、よくここまで続いた」と話し、8周年に向けても意気軒高だ。（格清政典）

同番組は「大阪を元気に」をテーマに平成20年7月に放送開始。番組関係者によると、同局が中之島（大阪市北区）からミナミ（浪速区）に移転したのをきっかけにミナミを中心とした大阪の人とのコミュニケーションの場にしたいと企画したという。

その際に、メインパーソナリティーとして白羽の矢が立ったのが野杵さんだった。「毎週日曜日の夕方に収録しているんですが、よう続いたなあ…というのが率直な気持ちです」と笑顔を見せる。

もともとアナウンサー志望だった野杵さんは、雑誌社「オール関西」を経て、実家の文具店を継いだという経歴の持ち主。大阪…特にミナミをこよなく愛し、土産物店「なにわ名物いちびり庵」を経営する実業家という一面を持つ。「たこ焼ようかん」やボードゲーム「モノポリー」の大阪環状線版などユニークな大阪土産を開発する一方で、なにわ名物開発研究会が毎年開催している「なにわ大賞」の仕掛け人でもある。

野杵さんらの人脈を通じて、ゲストを呼んで1時間15分にわたってゆるいトークを展開。「とてもFMらしくないといわれますが、それが逆に番組の特徴になっています」と話す。ゲストもライトノベル作家の馬場卓也さんや河内長野市職員の東（ひがし）映（てる）道（みち）さんら多岐におよび、手作りの番組制作にこだわっている。

関係者によると、自主制作番組でここまで続くのは非常に珍しく、現在でも協賛会社10社がサポートしているという。これまでに出演したゲストも延べ約400人を数えるが、野杵さんは「まだまだ紹介していないエリアも多く、僕が知らないことも多い。ホンマに大阪は広いなあと実感しています」と話す。

7月で番組は8周年を迎えるが、「400回のときは忙しくて、記念的なことができなかつた。だから、8周年には何かやりたいね」と笑顔を見せていた。

「介護に疲れた」母親が下半身不自由の娘と無理心中？ マンション風呂場に2遺体 大阪・旭区

産経新聞 2016年5月5日
5日午後6時半ごろ、大阪市旭区高殿のマンション一室の風呂場で、大阪府警旭署員が

70代ぐらいと40代ぐらいの女性2人の遺体を見つけた。浴槽には練炭があり、室内から遺書も見つかったことから、同署は、この部屋に住む無職女性（72）が下半身が不自由の娘（48）と無理心中を図ったとみて、身元などを調べている。

同署によると、遺体はいずれもパジャマ姿で洗い場に倒れており、目立った外傷はなかった。2人暮らしで、女性が娘の介護をしており、遺書には「介護に疲れた。死にたい」という趣旨が書かれていたという。

女性と連絡が取れないことを不審に思った親族がマンションの管理人とともに室内に入り、風呂場の扉が開かないことなどから同日午後6時20分ごろ、「倒れているかもしれない」と通報していた。

若年性認知症の夫の介護、思いをつづった詩集出版 五月女菜穂

朝日新聞 2016年5月5日



詩集「感語詩」を手にした小田尚代さん＝北区

子供の事、家の事、お金の事、退職後の事、しゃべりたかった、相談したかった——。京都市北区の主婦、小田尚代（たかよ）さん（58）が、8年前に若年性認知症と診断された夫への思いや介護の苦悩をつづった詩集「感語詩（かんごし）—あなたと行きたい、活きたい、生きたい」を出版した。

夫の修一さん（65）が若年性認知症とわかったのは2008年だった。前年の秋ごろから、簡単な単語が出てこなくなったり、いきなり怒鳴ったりするなどの異変が現れ始めていた。症状が進み、JA職員だった修一さんは定年まで2年を残して退職。尚代さんは、中学生から大学生まで4人の娘を養うため、介護をしながらパートタイマーとして働いた。

「誰にも悩みが言えず泣いてばかりいた一方で、誰かに現状を知ってほしいという思いがありました」と小田さん。介護で

感じるイライラや歯がゆさ、ちょっとした夫の変化などを詩にして、和紙に毛筆で書くようになった。詩集には41編を収録。娘が書いたヒマワリの絵を表紙にし、家族写真も載せた。

「オレは／子供がはたちになったら／この缶酎ハイ飲むねん」って／言ってた父の日、お誕生日に／子供からもらった缶酎ハイ／楽しみに取っておいたのに／覚えてる？／まだ置いてあるよ／お酒飲むことも忘れてる…／缶酎ハイをくれた娘達はもう／はたちになったよ／ほら「お父さん祇園でも飲み／連れてって」って言われてるよ

お父さん、／私あれこれお願い／ゆわへんよ／たったひとつ／たったひとつだけ／お願いきいて／前のお父さんに／戻って／ただそれだけ

昨年1月、修一さんは歩くのが困難になった。毎年、楽しみしていた家族旅行も難しい。小田さんは「介護はつらいことだらけ。でも、お父さん（修一さん）のおかげでいろんな出会いもありました」「詩集を読んだ方が共感してくれて、励みになっています」と話す。

108ページ、税込み2160円。問い合わせはクリエイツかもがわ（075・661・5741）へ。月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

